

グローバル化の中での 日本における 人文社会科学のあり方 岩井克人

この演題を決めた後に、グローバル資本主義が私自身の
予想を超えた大きさの危機に突入しました。

当初予告した演題を変えてこの金融危機について語るべ
きか悩みましたが、他の講師のお話との重なり具合から、
やはり予告通りの話をすることにしました。

参考に、今回の金融危機に関して日本経済新聞に掲載し
たエッセイを配布します。暇な時にでも読んで下さい。

グローバル化

	1970	1980	1990	2000	2005
貿易量 (1兆ドル)	0.4	1.9	3.4	6.3	10.0
資本移動 (1兆ドル)	0.0	0.1	0.5	4.0	6.0
移民数 (1億人)	0.8	1.0	1.6	1.8	1.9
世界実質GDP (2000年価格.1兆ドル)	12.0	18.0	24.0	32.0	36.0
インターネット利用者 (1億人)	0.0	0.0	0.03	3.6	9.6

グローバル化の背景

19C-20C初頭:(新)古典派経済学と自由放任主義

1929-30年代:大恐慌

1936:ケインズ革命(『一般理論』の出版)

1960後半から:新古典派反革命(M.フリードマンら)

1980年代:レーガン(米国)サッチャー(英国)革命

規制緩和と金融自由化

1989: 社会主義の崩壊

1997: アジア通貨危機

2007: サブプライム危機からグローバル金融危機

問題設定：

科学のグローバル化の中で、
なぜ日本における人文社会科学研究は
自然科学の分野に比べて、
「グローバル化」が遅れているのか？

日本経済/日本社会/日本文化研究は
「国内消費向け」との開き直りも可能。
(一部の社会学・法学・思想、さらに政策論)
だが、どの学問も学問である限り開かれるべき

1. 英語力の問題？

新古典派経済学やゲーム理論など、
英語力より数学力が要求される分野は例外。
経済学でも応用分野は他の人文社会科学
に近くなってくる。

（ただ、経済史などでも国際化が進展。）

←英語での読み書き教育の不足。

（日本近代の歴史、さらに明治以降の国産の
学問研究の厚みが逆にマイナスに。）

←大学院レベルでの英語化が必要。

だが、単に英語が下手と言うだけではない。

←言語は理論の単なる「表現手段」？

自然科学では

Yes。

だが、人文社会科学では

？

2. 「普遍」として 文化・社会・経済研究

理論経済学やゲーム論では、すでに国際化。
この傾向は、幾つかの社会科学の数学モデル化や実証研究化によって進展するはず。
(計量政治学・社会心理学・数理社会学など)

←ただし、大前提：
文化・社会・経済でも、自然科学と同様に
「普遍」モデルは一つ。

だが、
人文科学や幾つかの社会科学では、言語に
よる表現と「理論」の内容とが分離不可能。
翻訳不可能生の問題。
（「詩」がその純粹形。
言語の世界の中で自己完結。
哲学思想も同様の要素あり。）
「教科書」ではなく「古典」が存在する。

欧米における膨大な研究の蓄積。

(TextとContext)

基本概念も、ギリシャ・ローマや聖書に淵源。

異なった言語・文化の中で育った人間が、
その蓄積を踏まえた上で議論するのは大変。

(一人の思想家の研究で一生を費やす?)

更に、それらの概念を駆使して、「近代とは何か」などの大テーマについて、日本の研究者
が語っても、国際的な認知はもっと大変。

では
日本の人文社会科学研究者は
どうすればよいのか？

A) 数理的「普遍」モデルに特化？
その場合、違和感の中に生きる？
B) 欧米に移住して、骨を埋める？
その場合、アジア系マイノリティ化？

ほかの生き方はないのか？

過去を見る

—戦前の日本資本主義論争—

労農派—日本は不徹底ながらも資本主義。
(遅れていても近代。いつかは欧米に。)

講座派—日本はまだ半封建的地主制。
(近代以前の要素を残して固定化。)

論争の内容自体は、現在では無意味。

←社会主義になるには、
一段階の革命で良い（労農派＝社会党系）
二段階の革命が必要（講座派＝共産党系）
だが、

日本経済や社会を
「普遍」の<遅れ>とみるか
<普遍>からの「逸脱」(<特殊>)とみるか
→日本研究の二つの在り方の原型。

日本普遍論と日本特殊論

普遍論

- 欧米で展開された理論をそのまま日本社会や日本経済に適応。
(典型例は、新古典派経済学。)
- 一定の国際的な業績は産出可能。
だが、往々にして「翻案」的研究。

特殊論

→ 日本文化の特殊性を強調。

たとえば「場の論理」、「日本的経営」、etc.

何回か「日本論」ブーム

(＝特殊性のマイナス価値をプラスに転化。)

○ 特殊論の国際化の可能性：

丸山真男の翻訳が最善の例。(欧米社会科学の分析概念を日本社会に対して見事に用いたことによって国際性を獲得。)

多くは、外国(特に欧米)の日本研究者との交流に限定されがち。Native Informants化？

**「遅れ」論でも「特殊」論でもない、
第三の道はあるのか？**

**←二つの可能性。
(二者択一ではない)**

可能性1: 複数均衡モデル。

欧米社会と日本社会を含む非欧米社会を、
先進vs.遅れという対立としてでも、
普遍vs.特殊という対立としてでもなく
普遍の二つの形態として理解可能な
「メタ普遍」モデルの構築。

W

複数均衡モデルと歴史的経路依存性

このアプローチには、日本や他の非欧米社会
の研究者にこそ大いなる可能性がある？

なぜなら、非欧米社会の研究者は、必然的に
「二重言語者」にならざるを得ない。

→「メタ」的視点。

例

青木昌彦氏の比較経済体制論

山岸俊男氏の「信頼の構造」モデル(?)

(私の法人企業2階建て論)

ただ、「普遍論」か「特殊論」に陥り易い。

可能性2: 基軸・非基軸関係モデル

グローバル化された世界の構造に関する、
3つの見方。

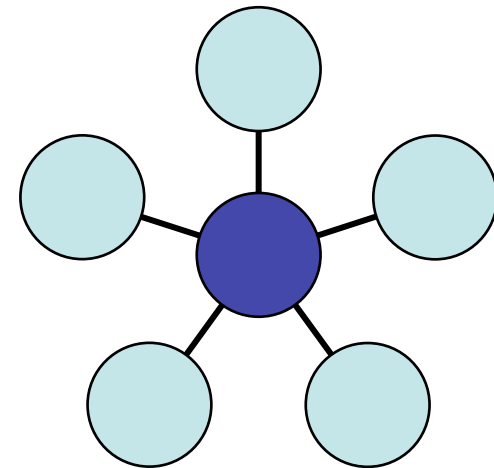
1. 国連的な建前平等主義=文化「相対主義」
だが、Wishful Thinkingに過ぎない。 X
2. 支配/被支配関係→アメリカ覇権(帝国)論
かつての「左翼」思想の生き残り X
→ともに、将来もくりかえし登場するはず！
(人間がほぼ必然的に陥る思考パターン)

3. 基軸/非基軸関係 ○

→かつては欧米全体、現在はアメリカが基軸。

基軸通貨(Key Currency)としてのドル、
基軸言語(Key Language)としての英語、
基軸政治(Key State)としてのアメリカ外交

「基軸」とは？



例：アメリカのモノを買うためではなく、チリと取引するためにドルを使う。そのチリもアメリカのモノを買うためではなく、韓国と取引するためにドルを受け取る。そして韓国も.....。

アメリカの経済力・文化力・軍事力とは独立に、「自己循環論法」によってドル・英語・米外交が世界経済・文化・政治の「媒介」となる。

←歴史的契機＝第二次大戦直後の
圧倒的なアメリカの存在

だが、自己循環論法が成立すると、自動運動。

だが、アメリカ自体もしばしば誤解

→覇権国としての行動

例：世界政治におけるネオコンイラク戦争、
経済発展における新古典派的政策。

非基軸国もしばしば誤解

→アルカイダ的発想

＝アメリカを覇権国として攻撃。

ブッシュ政権の大失政によって、
ドルの基軸性と米外交の基軸性は凋落の兆し。
だが当分、アメリカに取って代わる国はない。
少なくとも英語の基軸性に関しては、
これからますます強まるはず。

日本の近代化の歴史



この基軸/非基軸関係の中の非基軸性を
近代の世界史の中で最初に経験
←「普遍性」を持つはず。